様式3

令和5年度 自己評価表（最終評価）

鳥取県立米子工業高等学校

校訓	自律創造協働	中長期目標 (学校ビジョン)	ものづくりができる人づくり ものづくりを通しての人づくり	米工ミッション	地域社会・産業界に貢献する人財育成	今年度の 重点目標	1 ものづくり人財としての自律した態度と技術の育成 2 ふるさとキャリア教育による在り方と生きがいの創造 3 持続可能な地域社会への協働参画 4 地域ネットワークとの連携 5 向上心とワークライフバランスの実践
				目指す生徒像	自主自律の精神を持ち、他者を思いやる 創造力豊かな工業人		

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初				評 価 結 果		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 ものづくり人財としての自律した態度と技術の育成	(1)実践的な技術・技能の向上	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍においても参加可能なコンテスト・大会に参加している。 令和4年度ジュニアマイスター取得者実人数は28名。 	<ul style="list-style-type: none"> 資格検定に意欲的に取り組んでいる。 ものづくりに対する興味関心が高まり、自ら技術向上に動いている。 高校生ものづくりコンテストなどに積極的に参加し、上位へ入賞する。 卒業生の3割(50名)以上が、ジュニアマイスターを取得している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒「自分は実習を通じて、技術・技能が身についた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 卒業生の3割以上の生徒がジュニアマイスターを取得すればA。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習などをおしてものづくりの楽しさを体験させ、より高い技術習得を意識させる。 専門の授業において、ものづくりの楽しさと意義を生徒に伝え、生徒がコンテストにチャレンジする意欲を高める。 部活動とのバランスに配慮して取組ができるよう検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートの「自分は実習を通じて、技術・技能が身についた」との回答は96.6%であった。 ものづくりコンテストでは旋盤作業部門、化学分析部門で中国大会出場。測量部門が初の全国大会に出場。 マイコンカーラリー全国大会に2年連続出場した。 令和6年1月時点ではジュニアマイスター取得者は32名(18.9%)(ゴールド4名、シルバー8名、ブロンズ20名)である。昨年度[令和4年度の最終28名] 	B	<ul style="list-style-type: none"> 技術取得、技術向上のために継続的に練習すると共に専門的技術を有する外部の人材を活用する。 参加するコンテストを精選して参加する。 生徒に声掛けを行い、ものづくり同好会に参加する生徒を確保する。
	(2)安全教育による5Sの実践	<ul style="list-style-type: none"> 実習時に5Sと安全教育を連動させて指導している。 	<ul style="list-style-type: none"> 5Sの意味を理解し、取り組み内容が説明できると共に安全を意識した行動ができる。 5Sや安全への意識を日常生活に活かしている。 自転車用ヘルメットの重要性を認識し、自転車を使用する時に着用している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒「5Sの習慣が身についた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ヘルメット着用率が80%以上ならばA。 教職員「安全教育について概ね徹底できた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 各授業・実習の中で具体的な5Sの目的と取り組みを明示し、実践することで身につけさせる。 5Sの考え方を日常生活や部活動などに転用できるよう考えさせ、安全教育を定着させる。 整理整頓を促す啓発ポスターを掲示し、5Sの意識付けを行う。 保護者、関係機関と協力しながらヘルメットの重要性について周知・指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートの「5Sの習慣が身についた」との回答は88.5%、教職員アンケートの「安全教育について概ね徹底できた」との回答は100%であった。 「自己の命を守るためにヘルメットの着用の必要性を感じる」との回答は89.4%であるが、着用率は約6割である。 整理整頓を促すポスターを掲示し、各場面で5Sの意識付けを行えた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の日常生活の中で5Sをはじめ安全教育が浸透するようSHRや授業・実習、部活動における指導を継続的に行う。 講演会や生活向上委員の活動を通じて、ヘルメットの着用を引き続き呼びかける。
	(3)自己研鑽による学力の向上とICT活用	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を実施し、必要とされる基礎学力のレベルを認識させている。 教職員はICTを活用した授業展開の方法や今後の教育のあり方などについて研修している。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を活用し、社会人として求められる基礎学力のレベルを認識し、就職試験等に対応できる力をつけている。 生徒はICTを活用しながらお互いに協力し合い、主体的に学んでいる。 教職員が授業や生徒指導にICTを活用している。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テスト及び授業に関するアンケートで生徒の肯定的な回答が80%以上ならばA。 SPI小テストの結果が向上した生徒が全体の80%以上ならばA。 生徒、教職員のICTの活用が80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テストの実施意義について、年度当初に文書を配布し生徒に説明する。 SPI小テスト実施後に解答を示し、不十分な理解を補うと共に低得点者に対して学び方を指導する。 オンラインコンテンツの活用、他校の視察や校内の授業公開などで研鑽を積み、生徒の意欲を引き出す授業を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートの「SPI小テストに一生懸命取り組んだ」との回答は67.1%、「自分は、授業(座学)が理解できた」との回答は86.8%であった。 生徒アンケートの「ICT機器を授業や学校活動で活用している」との回答は83.9%であった。 教職員アンケートの「授業などでICT機器を活用した」との回答は95.0%であった。 教職員が研修を受講し、新たな内容を授業に取り入れることなどをとおして授業改革を進めている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> SPI小テストの取り組みについては、引き続き意義を理解させ積極的に取り組むよう促す。そして、学び直しのフィードバック等を行う。 教職員の学び合いの場として、校内の授業公開週間等の積極的な活用を促す。 ICTを活用した授業づくりに向けた校内研修を企画・充実する。
	(4)バランスのとれた計画と行動力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 遅刻をする生徒が一部に見られる。 レポート、課題など期限内に提出できない生徒が一部見られる。 資格検定の補習や各種大会に参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 規則正しい生活を送り、学校に遅刻することなく元気に学校生活を送っている。 レポート・課題が期限内に提出できるように、計画的に行動している。 資格取得の学習と部活動を計画的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 2学期までの遅刻合計1回以下の生徒が80%以上ならばA。 レポート・課題の期限内の提出が全体の80%以上ならばA。 生徒「計画的に行動することに関する」集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 届けなく遅刻、早退、欠席した生徒の保護者へ連絡を取り、家庭での基本的な生活習慣の改善について協力をお願いする。また、生徒が抱える現状を職員が丁寧に聞き取り改善のための適切なアドバイスを行う。 提出物が遅れる生徒に対して、計画的に取り組むように声掛けをおこない、支援する。 大学進学希望者、公務員受験希望者への計画的な指導を実施する。 資格取得を推進し、それぞれの生徒に必要な資格・検定の選択と受検までの計画の立案を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 2学期までの遅刻合計1回以下の生徒が57%であった(やむを得ない事情含む)。 生徒アンケートの「将来の進路実現に向けて、学習・資格などを計画的に取り組むことができた」との回答は82.8%、生徒(2年生)の「来年の進路実現に向けて計画的に取り組むことができた」との回答は66.6%であった。 資格取得の推進に向けて、計画的に補習を行う等の支援を実施することができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 保護者との連絡をより密にし、特定の遅刻者に対して継続的な指導をする。 支援の必要な生徒に対しては、引き続き関係機関等と連携しながらチーム支援で対応し、基本的な生活習慣の改善を図る。 提出物については、継続的に支援・指導を行う。
	(5)特別活動と部活動によるコミュニケーション力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 部活動への加入率は高く活発に活動している。 コロナ禍においても生徒会を中心に実施可能な生徒会行事等を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの生徒が部活動、生徒会活動やボランティア活動に参加し、満足した活動を行っている。 部活動や生徒会活動をとおり、競技力のみならず、人間関係やチャレンジ精神をより高めている。 生徒会執行部が主体となった生徒会行事が行われている。 学校生活及びSNS上のコミュニケーションが向上している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会活動に関するアンケート項目に対する肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。 部活動への加入率が80%以上であり、さらに活動をおしての満足度が80%以上ならばA。 生徒会執行部の70%以上が主体的に活動できたと認識していたらA。 	<ul style="list-style-type: none"> 年度途中で退部した生徒にも、本人の意向を尊重しながら、他の部活への入部を呼びかける。 部活動での大会成果や活動をHPや校内掲示板へ掲載し、活動の魅力を伝えることで部活動への加入を呼びかける。 定期的に生徒会執行部から情報発信をおこない、生徒会行事への参加意識を高める。 生徒会活動や授業などをとおして、コミュニケーションを円滑に図れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートの「本校での部活動や同好会活動に満足している」との回答は85.1%、保護者アンケートで「本校は、部活動が活発である」との回答は92.4%であった。 部活動加入率は83.5%であった。 生徒会執行部が中心となって各行事を実施することができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 大会結果・活動状況など部活動の魅力発信を行う。 生徒会執行部が新たな企画を計画及び実施し、生徒会活動の活性化につなげる。

		年 度 当 初				評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 ふるさと キャリア教育 による在り方 と生きがいの 創造	(1)倫理観のある 人づくりの実践	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の挨拶は概ねできているが、自ら挨拶できない生徒が見られる。 思いやりに欠けた言動によるトラブルがみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら挨拶ができ、場面に応じた言葉遣いができるなど、マナーがさらに向上している。 周囲の人への配慮した行動ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員「生徒の挨拶は良い」「生徒の言葉遣いは良い」等アンケートの集約結果が全体の80%以上ならばA。 対人関係のトラブルの減少 	<ul style="list-style-type: none"> 登校時、授業開始時など様々な機会を捉えて挨拶の習慣化を図る。 地域との交流や実習などの協働をとおして、他者理解を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートの「進んで挨拶をする・言葉遣いなど自分のエチケット・マナーはできている」との回答は92.7%であった。 教職員アンケートの「生徒の挨拶はよい」との回答は76.2%、「生徒の言葉遣いはよい」との回答は52.4%であった。 自発的に挨拶する生徒が増えている。挨拶のできていない生徒には教員側から積極的に挨拶をしている。 他者に配慮できないことによる生徒どうしの相互の会話などで、いじりやからかい、人権侵害などにつながる発言や行動によるトラブルがあった。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶については、継続的に指導を行う。 他者に配慮した行動ができるように、場面ごとに具体的に指導する。 生徒・教職員・保護者も含め、人権教育職員研修を行い、普段の学校生活の中からいじめや差別・人権侵害を許さない学校の文化を構築する。
	(2)生涯を見据えた 生き方の構築	<ul style="list-style-type: none"> 就職希望者については100%の就職率を達成している。 進学希望者については国公立大学へ1名合格した。 コロナ禍においても受け入れ企業が確保できたため、全科でインターンシップを実施した。 コロナ禍においても、地元企業見学・県外企業見学を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの生徒が第1希望の進路先に内定または合格する。 実際の現場を見学することにより専門科目に対する興味関心が高まり、意欲的に日々の学習に取り組んでいる。 企業現場での実習を通して専門的な知識や技術・技能に触れることで、進路に対する意識が高まっている。 大手企業見学をすることにより多様な職業観が育ち、所属学科や専門科目に対する興味が高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路実現に向けた主体的な取組を行い、生徒が満足できる(納得できる)進路決定を行う。 多くの生徒が第1希望の進路先に内定または合格する。 進路指導及びインターンシップ・企業見学に関するアンケートで生徒の肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。 生徒の第1希望の進路先への内定または合格が90%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が主体的に進路選択を行えるよう、キャリアパスポートを活用する。 進路状況や進路に必要な知識・技能に係わる情報を、LHRや進路講演会などを通じて適宜提供する。 求人票や指定校一覧を生徒各自のICT機器で閲覧できるようにし、家庭で進路決定の資料として活用できるようにする。 面接指導、個別指導を実施し、効果的組織的な進路指導を行う。 企業を見学することにより、産業全般に対する認識を深めさせ、将来の進路選択に明確な目標を立てさせるとともに、所属学科や専門科目に対する興味関心を喚起する。 訪問によらない企業を知る方法を検討する。 インターンシップでの受入企業を確保し、実際の現場で作業をさせることにより、仕事の大切さ・意義・困難さを体験させる。また産業界での知識や技術・技能を学ばせることにより、日々の学習への意欲や積極性を喚起する。 資格取得に向け、放課後・長期休業中に補習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒(3年生)アンケートの「自分は進路指導を受けて、就職先・進学先を決める際に役立つ」との回答は87.6%であった。 生徒(2年生)アンケートの「来年の進路実現に向けて計画的に取り組むことができている」との回答でインターンシップは89.8%、県外研修旅行は78.9%であった。 生徒の第1希望の進路先への内定・合格は92.9%であった。 学校全体で面接指導や個別指導を行い、就職希望者については内定率は100%、国公立大学進学者は4名となった。 外部講師を招き専門的な内容について生徒の理解を深めることができた。 地元企業説明会を1・2年生に実施し、早期に進路意識を高めさせる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 3年間での進路指導の流れを生徒・保護者に明示し、適時適切な指導を行う。 希望者模試の実施など大学進学希望者、公務員希望者に対し計画的な指導を行う。
3 持続可能な 地域社会への 協働参画	(1)ユーザー視点 による地域課題への 貢献	<ul style="list-style-type: none"> 地域貢献活動を各科が積極的に行っている。 課題研究で身近な課題に関するテーマ設定を設定した。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の課題を解決する取組や身近な人の困りごとを解決する支援活動により、ものづくりの意義を学び、自己有用感が高まっている。 課題研究発表などで視聴者が分かりやすく工夫している。 	<ul style="list-style-type: none"> ものづくりをとおして地域社会に貢献するアンケート項目に対する肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域や身近な人の課題に目を向けさせ、自分たちの学びで関わられることを考えさせる。 課題研究を支援することで、生徒が地域課題へ積極的に取り組む。 生徒が地域課題を発見し、テーマや研究内容の設定を生徒主体で取組むように指導方法を工夫する。 課題研究の計画、中間報告、最終報告をHPに掲載し、取組を公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒(3年生)アンケートの「本校での学びやものづくりをとおして、地域社会への貢献意欲が高まった」との回答は75.2%であった。 課題研究において地域貢献活動(ゴミストッカー製作、ベンチの製作、駐車場ライン引きなど)を行った。 課題研究において、生徒が地域の方などと接すること模索することができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 地域の公民館等と連携しながら地域課題を把握し、積極的に貢献活動を行う。 生徒が専門技術を活かした地域貢献活動を行えるよう継続的に支援する。
	(2)防災・減災への 専門力の活用	<ul style="list-style-type: none"> 啓成小学校との合同避難訓練を年1回実施。 雪かきボランティア活動を行っている。 災害時をテーマに課題研究で取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 合同避難訓練などとおして、防災への意識の向上を図り、将来災害時に行動できる。 課題研究で専門性を活かし、災害・減災について取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒「課題研究等の取り組みを通して、防災に関する」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 合同避難訓練・授業などを通じて、生徒が防災について専門性をどのように活かすかを考えられるようにする。 生徒会を中心に「雪かきボランティア」への声掛けを行う。 課題研究で安心安全な社会を実現できるように教員が支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒(3年生)アンケートの「本校での学びやものづくりをとおして、防災・減災などの身近な課題への意識が高まった」との回答は77.8%であった。 啓成小学校との合同避難訓練を10/31に実施。 「はるかひまわり10周年記念」イベントに参加して、生徒にとって安心安全な社会の実現に向けて行動することを考える機会になった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 地域の方と関わるイベント等があれば、積極的に参加していく。 防災・減災において、地域の状況に即した取り組みを継続して行う。
4 地域ネット ワークとの連 携	(1)地域と連携した 教育活動	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍のため小学生に対し出前授業、中学生体験学習は中止。中学校への出前授業は1校実施した。 社会人講師による技術指導を実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> 出前授業等で様々な異校種連携とおして、小中学生がものづくり教育への関心を高める。 地域の人財を活用して専門的技術を習得し、資格を取得している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒、教職員「地域貢献」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域や身近な人に具体的な製作物やシステムを提供する生徒の活動にアドバイスと支援を行う。 中学生体験学習や学校説明会で、ものづくり教育の意義を理解し、関心を高めてもらえるよう内容をブラッシュアップする。 資格取得に向け、地域の人財を活用したサポートを行う。 ICTを活用した新たな交流方法も検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートの「本校での学びやものづくりをとおして、地域社会への貢献意欲が高まった」との回答は75.2%であった。 教職員アンケートの「実習や課題研究とおして、生徒の地域課題に対する意識は向上した。」との回答は71.4%であった。 学校祭において、各産業界の方に業界に関する展示をしていただいた。 外部講師・学習支援員による資格取得支援を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 体験学習や出前授業などを通して小学校・中学校へ本校の魅力を継続して伝える。 地域の活動団体と連携して、生徒の活動の場面をつくる。 専門的技術を有する外部講師・学習支援員などによる資格取得支援を行う。
	(2)米工教育活動 の発信	<ul style="list-style-type: none"> 学校から情報発信を行い、学校理解を進めている。 米工MAKERSを週2回発行している。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページ、マチコミメール、マスメディア等を通じ、学校情報の発信をタイムリーに行う。 米工MAKERSでは学校の取組に加え、生徒の何気ない成長を取り上げた内容となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員「中学生体験学習・学校公開等を通して、中学校や保護者へ本校の内容を概ね伝えることができた。」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 保護者「家庭への連絡がきめ細かく行われた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 	<ul style="list-style-type: none"> 見やすいHPのデザインを検討し、変更する。 ホームページの内容(学校行事・部活動報告など)を定期的に更新するなど、積極的な情報発信に努める。 マチコミメールを活用し、保護者へ情報を迅速に伝える。 報道機関への資料提供を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートの「家庭への配布物、電話連絡、学校HP、まちこみメール等を通して、家庭へ連絡がきめ細かく行われた」との回答は89.0%、「本校のHPをよく確認している」との回答は48.5%、「米工MAKERSをどちらかというと読んでいる」との回答は35.7%であった。 教職員アンケート「学校HP、米工MAKERS、マチコミメールなどを活用し地域や保護者へ情報提供ができている」との回答は80.9%であった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き迅速な情報発信に努める。 各科・各部活動の情報発信を積極的に行い、HPへの掲載方法に関する研修会を行う。 HPのデザインに関して検討していく。 米工MAKERSでは学校の取り組みのみならず、生徒の成長を取り上げ、魅力ある発信につなげる。

5 向上心とワークライフバランスの実践	(1)自己研鑽	・オンラインコンテンツを利用するなど自らを高める取組を実施している。	・自己研鑽に励み、生徒の成長を支援する力量を高めている。	・研修会に参加するなど具体的な取組を実施した。	・自ら高めたい目標を設定している。 ・研修案内を意識し、積極的に参加する。 ・今後必要となる専門的な知識・技術の習得のため教育書籍やオンラインコンテンツを活用する。	・研修に参加するなど、自己研鑽に取り組み、学習をとおして生徒に還元した。 ・オンラインコンテンツを活用する教職員が増えていく。 ・研修の参加、Findアクティブラーナーを活用している教職員が限定的など、一部の教員が、自己研鑽に努めている。	C	・授業改革・ICT活用・先端技術などの研修に積極的に参加し、生徒に還元していく。 ・自己申告書を活用し、年度当初に自己研鑽の意識付けを促す。 ・オンライン研修の活用を促す。
	(2)ワークライフバランスの取組	・多くの教職員の時間外業務時間が削減されている。 ・計画的に業務を行っている。 ・部活動計画を立て長時間の勤務にならないよう取り組んでいる。	・必要なものが必要なときにすぐ取り出せる状態にある。 ・業務上の様々な資料について、再利用、共有できる状況にあり、次に業務に当たる職員が円滑に取り組み、業務に当たる時間が削減されている。 ・部活動は平日3時間以内、休日(週休日・休業日含む)は4時間以内、土日のどちらかは休みを実践。 ・職員、生徒共に家族や地域での活動時間、自己研鑽時間が確保できている。	・教職員「ものの定位置を決め、実践できた」職員が80%以上ならA。 ・全教職員が時間外業務月45時間以内、年間合計360時間以内ならばA。	・ものを置く場所を決め、定位置に置くことを励行し、整理整頓に努める。 ・各自が資料の整理方法についてルールを決め実践する。 ・担当した業務において、気づいた改善点はすぐに反映させ、資料の修正、申し送り事項を作成する。 ・先を見通した業務計画、準備計画を作成し実施する。 ・部活動計画を立て、長時間勤務を防止する。	・教職員アンケート「ものの定位置を決め、業務を効率的に行った」との回答は95.3%であった。 ・令和5年12月末時点で時間外業務時間が月45時間を超えた者が14名であった。 ・令和5年12月末時点で時間外業務時間が年間合計360時間を超えた者が延べ3名であった。 ・部活動計画で長時間勤務の抑制を図った。	C	・引き続き職員室等の整理整頓に努め業務の効率化を図る。 ・電子ファイルを適切なフォルダに保存する。 ・業務シートを活用・分掌間の連携で、業務改善を図る。 ・適切な部活動計画を作成し実施する。

評価基準

※評価基準に複数の目標を設定している場合、全ての目標を達成してA評価とする

アンケート結果によるもの (部活動関係も準ずる)	A 80%以上 B 70%以上～80%未満 C 60%以上～70%未満 D 50%以上～60%未満 E 50%未満
-----------------------------	---